

卒

業

生

へ

の

# BOOK LIST

教養教育院

本田逸夫 先生

2017.2 (別冊)

今年は、まず昨年と一昨年に取りあげた本の一部（＝『金融が乗っ取る世界経済』、『ブラック企業2』、『若者が働くとき』）を簡単に紹介する。本ブックリストに初めて接する、そしてとくに働いている、またはこれから働き始める学生諸君のためである。つぎに、数冊の本を新たに紹介する（『北九州学 その10』以下）。それらは文体と分量の両面で読みやすい作品ばかりである（その内、最後の一冊以外については、今回よりかなり短い紹介を前の版↓で行なった。

[https://www.lib.kyutech.ac.jp/library/sites/default/files/2017\(第3版\)1.pdf](https://www.lib.kyutech.ac.jp/library/sites/default/files/2017(第3版)1.pdf)）。

卒業・修了生でも在校生でも、図書館や書店で以下の諸書を気軽に手にとって読んでほしい。

## ロナルド・ドーア『金融が乗っ取る世界経済―― 21世紀の憂鬱』<sup>ゆううつ</sup> 中央公論新社（中公新書）、2011年10月。

ISBN: 9784121021328 本館 閲覧室1階 文庫 学生用図書 081||C-1||2132

本館 閲覧室2階 可動式書架 研究用図書 333.6||D-1

分館 閲覧3階 社会科学 学生用図書 333.6||D-1

私たち<sup>ふつうじん</sup>普通人の生活に<sup>インパクト</sup>いまだかつてないほど大きな衝撃を及ぼすようになった世界経済――その近年の支配的な傾向である「金融化」が、本書のテーマである。そこでは、（付加価値を創造しない）金融が（付加価値を創造する）実体経済にたいする支配を強め、富・人材等をも吸収しつつある。そして「金融化」は、リーマン・ショックなどのとんでもない危機をひき起こしたにもかかわらず、世界中に広がって諸社会を大きく変質させている。

本書では、その「金融化」の諸局面、それを支える<sup>イデオロギー</sup>思想（「市場の効率性仮説」等）・技術（金融商品の「証券化」等）・政策（諸々の規制緩和等）、帰結（投機や不正取引の増殖、貧富の差の拡大、社会保障の衰退等）、そして金融危機の予防のための国際的な取り組みの内容と限界などが明らかにされている。難しいところは用語辞典（ネット上にもある）などの助けを借りて読んでいけば、世界と日本の現状について多くを教えられるだろう。

著者は英国人で日本研究の<sup>たいか</sup>大家。かつての日本やドイツの資本主義に（一部、過剰に）好意的な立場から「金づくり」志向の「アングロ・サクソンの資本主義」が主導する「金融化」を批判しており、妥当な指摘が多い。その広大な視野とユーモラスで洗練された<sup>たく</sup>（巧みな日本語の）文章も、魅力的である。

著者は、日本人が「金融化」のイデオロギーに「洗脳」され、利益の追求に<sup>きょうほん</sup>狂奔する「<sup>しょうじん</sup>小人の道」にいわば集団転向しつつあることを、<sup>うれ</sup>憂えている。その<sup>げん</sup>言をどう受けとめるかが、「モノづくり」にかけるエンジニアはもちろん、日本人すべてに問われている。

※ 本書のより詳しい紹介を、

<https://www.lib.kyutech.ac.jp/libt/top/news/booklist2015.pdf> で行なった。

# 今野晴貴『ブラック企業2 「虐待型管理」の真相』

文藝春秋社（文春新書）、2015年3月。

ISBN:9784166610037 本館 閲覧室2階 可動式書架 学生用図書 335.2||K-9||2

分館 閲覧3階 社会科学 学生用図書 335.9||K-2||2

ブラック企業の存在が知られるようになった現在もその被害はやまないという。そのさまざまな手法の解明が本書前半のテーマで、とくに重要なのが、「精神の<sup>ひだ</sup>襞の奥に入り込<sup>から</sup>み「絡め取<sup>ら</sup>る、その労務管理の分析である。それは、<sup>かこく</sup>過酷な長時間労働と不断の業績ノルマの圧迫、家族・友人とのコミュニケーションの喪失などにより労働者を「自分を責める」以外の思考が不可能な「心神喪失」状態に追い込み、パワハラなどでそれを<sup>こうしん</sup>昂進させて、ほとんど無意識の労働を続けさせるものである。その労務管理は、日本のグローバル化の結果などではなく、「サービス業で<sup>ぼくだい</sup>莫大な利益を出すための方法論」だ、と著者は<sup>かっぱ</sup>喝破する。そしてその手法は、製造業や「超大手・優良企業」にも浸透しつつあり、中高年社員をも<sup>ひょうてき</sup>標的にしているという。

本書の後半はブラック企業対策論で、労働法や行政当局による取締が必要・有効な範囲（と限界）を示した上で、個別企業を越えた、労働時間と賃金の関係に関する「共通の基準」を——NPOやユニオン（従来型ではない新しい労働組合）による「労働市場の情報センター」の形成を通じて——確立する必要を強調している。最終章では、個別企業の短期的利益のみを追求する「近視眼的な経済運営」が人材を使い<sup>つぶ</sup>潰し「日本の未来」を破壊しつつある、と指摘されている。日本では社会全体に「思考停止」の風潮が<sup>まんえん</sup>蔓延し、“規制緩和で効率化し労働問題も解決する”との「でたらめ」な空論がもてはや

されている。そんな虚説に騙されず、人間が大切にされ「ほどほどのスピード」で走る持続可能な社会への転換を実現すべきだ、というのである。

ブラック企業の被害者とならず、かつ社会の「ブラック化」を防ぐには、人々が通俗的な先入見から解き放たれ、「現場の現実」を知ること、そして未来を築くための社会的な知恵と行動力を身につけること、が必須だろう。その意味で、著者の分析とその提唱する解決策は基本的に妥当だと思われる。

※ 本書及び次の『若者が働くとき』のより詳しい紹介は↓を見られたい。

[https://www.lib.kyutech.ac.jp/library/sites/default/files/2016\\_第3版\\_0.pdf](https://www.lib.kyutech.ac.jp/library/sites/default/files/2016_第3版_0.pdf)

## 熊沢誠『若者が働くとき』 ミネルヴァ書房、2006年2月。

ISBN:9784623045938 本館 閲覧室2階 可動式書架 学生用図書 336||K-12

分館 閲覧3階 社会科学 学生用図書 336||K-9

働く中で、あるいは働こうとして苦難を強いられがちなふううの若者たち——彼らへの、「「使い捨てられ」も「燃えつきもせず」」とのメッセージを込めて、有数の労働研究者が「懸命に」まとめたのが本書である。

著者は、若者に寄り添い穏やかに語りかける文体で、若年労働者の諸問題を実証的・体系的・多面的に（経済・社会政策、経営、労使関係、学校や家庭との関係、ジェンダー等との関連で）論じており、その考察は緻密で説得的である。特に、「日本的」「伝統的」な経営や政策志向が労働者の内面に食い入って安価で苛酷な労働を受容させるとの問題点、正社員が置かれた苦境等、重要な諸問題に（研究史上いち早く）着目し探求している。また、（ノン・エリート）の職業労働のもつ自己実現としての意味や、労働者が自ら状況を改善するため

に必要な、社会構造の「深い」学習や労働組合活動の根本的な重要性についても、適切な助言をしている。労働のやりきれぬしんどさとの関係で、「したたかに趣味を楽しむ」ことをすすめた言葉も、若者への愛情を感じさせる。

著者は、若者に“正社員になれ”と求める主張や、若者にこらえ<sup>しょう</sup>がないということに彼らの離職の多さや貧困化の原因(責任)を求める説は<sup>まとはず</sup>的外れだ、とする。そして、フリーターのままでもまとも<sup>まとも</sup>に暮らしていけるような支援策が必要だし、また若者がフリーター、ニートに自足しがちなのは職業能力に対する自信のなさによるのだから、公的な(かつ無償かそれに近い)職業教育・職業訓練が不可欠だと論じている。「企業の雇い方、働かせ方を<sup>せいぎ</sup>聖域視」し経営権の「専制」を認めるような(戦後日本の伝統に属するともいえる)発想こそを改めて、それを問い、「<sup>くわい</sup>鍬入れ」しなければならない——その著者の考えは、現政権などとは正反対だが、<sup>せいこく</sup>正鵠<sup>い</sup>を射たものと思われる。

本書の充実した考察から、そしてそれらを一貫する著者の誠実さにも、学びたいものである。

## 『北九州学 その10 (基盤教育センターブックレット No.11) 』

北九州市立大学基盤教育センター、2014年12月。

本館 閲覧室2階 可動式書架 学生用図書 219.1||K-29||10

本ブックレットのシリーズは、発行者から寄贈されたらしく、本学を含む近隣の諸大学の図書館や、北九州市立図書館・福岡市総合図書館などの県内の公共図書館に所蔵されている。筆者はその存在を最近、初めて知った。その名の通り薄い小冊子だが、本号は特に魅力的な内容で、<sup>うれ</sup>嬉しい収穫だった。

本号は、2011年11月から翌年1月にかけて北九州市立大学で行なわれた諸講義から成る。そのうち、次の三つ（掲載順）が秀逸であり、すすめたい。

- (1) 西田新平「生活保護行政から見る北九州市の「人」と「街」——生活保護行政をめぐる二〇〇〇年代の出来事を手がかりに——」
- (2) 奥田知志「<sup>きずな</sup>「絆」の制度化」 第三の困窮——関係的困窮に対する人格的支援のしくみづくり」
- (3) 林えいだい「「青空がほしい」戸畑区婦人会のたたかい」

(1)では、北九大の教授（社会学）である著者が、生活保護の仕組の基本的な<sup>しくみ</sup>仕組や特徴から説き起こして、2000年代に生活保護申請に関連して門司・八幡・小倉で生じた「孤独死」事件の「歴史的・社会的な背景」を検討している。まず、それらが1980年代からの、北九州市の——「数値目標の設定とそのための面接指導」を通じた——生活保護申請を思いとどまらせる<sup>みずぎわ</sup>「水際作戦」や厳しい就労指導の産物であることを（先の事件後に設けられた検証委員会の報告に基づいて）指摘している。

数値目標による生活保護費の徹底的な抑制は、「適正化」を求める当時の厚生省通達への順応であった。しかしそれだけでなく、その抑制は、高度成長期以来の北九州市の行財政の方針、つまり、失業対策事業費や生活保護費などの「扶助費」<sup>けず</sup>を削って大規模公共事業最優先の地域開発を進める政策に基づいて、谷伍平市長（1967～87年在任）が進めたものでもあった。

「中央」官僚出身及び長期政権という点で谷氏と共通する、末吉興一市長（1987～2007年在任）も、その政策を受けつぎ生活保護費の抑制にも特に力を入れた。その帰結が、十大都市の中で北九州市の「人」と「暮らし」の水準

の低さを示す諸統計——平均寿命、生活習慣病と悪性腫瘍の死亡者、高齢化率、商店数と売り場面積（大型店などの進出と裏腹な商店街の衰退）、貧困層の増加などである。さらに末吉氏は、「住民主体の地域づくり」と称して、貧困層を含めた人々の「見守り」と「支え合い」を、市（＝福祉事務所）ではなく「事実上、住民自身の責任に<sup>ゆだ</sup>委ね」る政策を進めた。そして結局、「住民主体の地域づくり」は、多分に「生活保護費を抑制するための一手段に<sup>だ</sup>随してしま」った。

それは、先の開発至上主義的な行財政政策、いかえれば、北九州市が地域における住民自治のための能力や意欲などの必要条件や環境を整える手間や投資を<sup>お</sup>惜しんできたこと、の結果である。そのように、北九州市の「影」の部分＝生活保護行政と、「光」の部分＝住民主体の地域づくりは、実は、「根っこのところで互いにつながり合っていた」。今後は、その事実を見ずえて、「『陰の部分』と<sup>しんし</sup>真摯に向き合いながら、『光の部分』を広げていくために思考し行動すること」が、私たちに求められている、とされている。

以上、やや抽象的でカタい要約となったが、実際の<sup>やさ</sup>(1)は易しい言葉づかいで、適度のくり返しを<sup>まじ</sup>交えつつ、充実した内容をていねいに解説したものである（本書には、北九州市の自治基本条例を主に理念的に解説した講義も含まれている。だがそれは、(1)のような視角を欠くならば<sup>からねんぶつ</sup>空念仏になりかねないだろう）。

本学で学び、働く人々は北九州市を身近な地域に感じているだろうが、その知識は実は表面的なものにとどまっている面もおそらく少なくない。筆者もかつて数年間、戸畑に住んでいたが、今日までの（戸畑駅周辺の再開発による）戸畑の<sup>へんぼう</sup>変貌と市政との関連に気づかされた。そのように、本講義は、北九州市の歴史と現状、そして課題について受講者（読者）の関心をよび覚まし、

深く観察し考えることに<sup>いざな</sup>誘う、啓発的な仕事だと感じた。

(2)の著者は、キリスト教会の牧師であるとともに、1988年から北九州市でホームレス支援活動を続けてきた方。その活動はNHKテレビの「こころの時代」や「プロフェッショナル」でも紹介されてきた。筆者は前者（副題は「この軒の下で」）を見て、生活保護申請をめぐる死亡・自殺事件で悪名を馳<sup>は</sup>せた北九州でこんな取り組みも行なわれていたのか、と驚いた記憶がある。

本講義では、リーマン・ショックの年である2008年以来、くり返し発生した無差別殺傷事件で、犯人たちが発した「誰でもいいから殺したかった」との言葉を手がかりに、その私たちへの問いかけとしての意味を探っている。

国鉄民営化の行なわれた1985年にできた労働者派遣法は、派遣業種の「自由化」を進めて2003年にはついに製造業派遣も解禁した。そしてリーマン・ショック以降、派遣切りの結果、若者のホームレスが出現した。

著者によれば、彼ら、ホームレスの若者たちは（信頼関係ができる）、「誰でもいいから相談に乗ってほしかった」と言うことがある。しかし、派遣労働者を会社で担当している部署が（人事部ならぬ）購買部である事実が象徴するように、彼らは人格ではなく、「お前じゃなくて誰でもいい」ところの「物」として扱<sup>あつか</sup>われてきた。そのことについて著者は、「非正規雇用は非人間的雇用。つまり、人間を物化した。……これに対する大きな反論みたいなものが、無差別殺傷事件の中に見られるのではないか」と述べている。

著者は、「困窮」には、経済的困窮、身体的困窮、（人間）関係の困窮の三つがある、とする。そして、現在の日本社会の困窮では、「誰」ということに関する、第三の「关系的困窮」、すなわち、自分が「誰」（＝人格）と

いう扱いを受けず、「自分にとっての誰」（＝相談する相手）も居ない、ということに特に深刻な問題がある。「誰でもいいから殺したかった」というのは、その困窮に対する叫びだったのではないか、というのである。

その「関係の困窮」とは、家族と友人などの「人と人との関係を象徴するような、いわばホームと呼べるような関係性」の欠落である。その意味では、たとえば家族はいても家に帰れない青年の野宿者なども、ハウスはあってもホームレスなのだ、とされている。したがって著者たちの運動は、ホームレスの人々に必要なものとして、アパート（住まい＝ハウス）、（就職するための）携帯電話などの物理的要件と同時に、「誰」という「関係の要件」、＝「絆<sup>きずな</sup>」を徹底的に追求してきたとのことである。

“非正規雇用が非人間的雇用である現状こそを改めるべきだ”との著者の主張は、熊沢誠氏の考えとも重なる、的<sup>まと</sup>を射たものである。著者は、そのことを、信仰者にして実践家にふさわしく、「現場」における「言葉」の象徴的な意味を洞察することにより、指摘したといえる。

本講義には、印象的なエピソードが含まれている。たとえば、ホームレスの若者は、本人は否定しても、その歩き方を著者が見ると長年の経験からそれとわかるそうである。また、ホームレスのおじさんにアパートに入ってもらった後、立ち去る時に、部屋の中でポツンと座っているその姿が、ホームレスの時代と重なって見えて、「何が解決して何が解決していないかを問われた」という。そして、孫のような中学生たちに深夜、襲撃されたホームレスのおじさんが、“自分はホームレスなので、家と親があっても誰からも心配<sup>やっ</sup>されてない奴の気持ちがわかる”と述べたこと、など。

(2)を熟読すれば、ホームレスが若者の多くと無縁の例外的な現象どころか、

日本社会の根源的な問題の現れだと感ずるだろう。それと正面から「対決」する、しかもこの北九州で行なわれている取り組みから学びたいものである。

(3)の著者、林えいだい氏は田川（<sup>かわら</sup>香春町）出身のノンフィクション作家。その経歴と仕事ぶりは、氏も言及している朝日新聞の「ジャーナリズム列伝」の連載（<http://archive.fo/Jm5M> に引用）で知ることができる。その作品の一つが、戦前、福岡市薬院にあった陸軍<sup>しんぶりよう</sup>振武寮に関するもので、筆者は、それをテーマとした2007年のテレビ番組、「NHK スペシャル 学徒兵 許されざる帰還——陸軍特攻隊の悲劇」を見て、日本の戦争の本質に係わる重要な事実を発掘した、立派な業績に感心したことがある（その番組の内容＝文字起しは、ネット上で読めるようだ）。

本講義は、林氏のノンフィクション作家としての<sup>しゅつたつ</sup>出立と密接に係わる、半世紀以上前の、若き公務員時代の経験を語っている。数十冊の著書を出し一家を成した人にもかかわらず、方言を交えた謙虚で気さくな親しみやすい語り口で（長年の蓄積に基づく）豊かな知見を分けてくれるとともに、<sup>みずか</sup>自らの<sup>ライフ・ヒストリー</sup>人生史に重ねて「人生の中で<sup>こころざし</sup>志をもつ」必要をさりげなく強調しており、<sup>えがた</sup>得難い内容である。後述のように本学と関係する叙述も多い。

田中正造からの聞き取りをもとに足尾鉍毒事件を描いた、<sup>あらかんそん</sup>荒畑寒村の『<sup>や</sup>谷中村滅亡史』を読んで衝撃を受けた著者は、寒村のような記録文学を天職としようと<sup>こころざし</sup>志を立てて早稲田大学を中退し、筑豊の坑夫として働き始めた。ついで、香春町（採銅所）の村役場の職員となった後に、合併前の戸畑市の教育委員会に移り婦人教育の担当を勤めるに至る。

当時の戸畑は<sup>にってつ</sup>日鐵化学・八幡製鉄所などを発生源とする<sup>ばいじん</sup>煤塵汚染が<sup>すさ</sup>凄まじ

く、戸畑在住の著者の家族も喘息<sup>ぜんそく</sup>で苦しめられた。その（公害）問題を公民館の社会教育のテーマとするには、戸畑の企業城下町としての性格が大きな壁であった。しかし、かつて（=1951年に）戸畑・中原<sup>なかぼる</sup>の婦人会が九州電力発電所の煙突の公害について、住民が企業とではなく直接、市長と交渉するという巧妙な方法で解決した経験を知り、それに学んで、著者の担当した三六<sup>さんろく</sup>地域の婦人会も学習と運動を進めた。途中、企業側の圧力で挫折しかけたこともあったが、結局、新日鉄の工場に一個、5億円もする集塵装置を取り付けるよう要求して実現に至った、という。

その間における（著者もそれに協力した）婦人たちの精力的な活動＝「生活革命」はめざましく、新聞記事の切り抜き、本学や九大、山口大などの協力による資料収集、そして、公害の実態を記録した映画「青空がほしい」——本講義のタイトルでもある——の自主製作などが行なわれた。

著者によれば、こうした婦人たちの覚<sup>かく</sup>醒<sup>せい</sup>と活躍の背景には、女性の元来の強さ——それについて著者は、かつて調べた女の坑夫（ゴンゾウ）や門司・若松の女沖仲仕<sup>おきなかし</sup>（港湾労働者）の例<sup>あ</sup>を挙げて説いている——に加えて、戸畑の独自の「風土」と歴史があったという。すなわち、安川・松本財閥による明治専門学校（言うまでもなく、本学の前身である）の設立を通じた教育の充実、そして戦後の占領軍による、小集団学習を中心とした婦人の民主主義教育、である。本学の関係者の多くは、特に後者の遺<sup>う</sup>産<sup>さん</sup>を知らないだろうが、それを埋<sup>う</sup>もれ<sup>れ</sup>させてしまうのは惜<sup>お</sup>しいことである。

運動は勝利したが、著者は市当局からにらまれて再三の配置転換を強<sup>し</sup>いられたので、（勝利の時から覚悟していた通り）家族持ちにもかかわらず、意を決して辞職し、作家の道を歩み始めることになる。その経緯や後の活動につい

では、本講義（録）や前述の連載に譲<sup>ゆず</sup>ってここでは省略する。著者は最後に、「ひとりの馬鹿が、一つのことに執着して、今まさに死を迎えんとしている」と自ら<sup>みずか</sup>を描写している。小利口<sup>こりこう</sup>さがはびこる、日本社会の卑小<sup>ひしょう</sup>な現状との対照において味わうべき言葉であろう。

ドキュメンタリー映画『抗（あらが）い 記録作家 林えいだい』が公開中のようである（<http://aragai-info.net/screening/index1.html>）。

## 奥田知志『「助けて」と言おう』

日本キリスト教団出版局、2012年8月。

ISBN: 9784818408227 本館 閲覧室1階 可動式書架 学生用図書 198.6||O-3

本書は、「3. 1 1 後を生きる」と題されたシリーズの一冊で、講演とインタビュー、各一つずつの記録から成る計 80 頁足らずの小冊子である。同じ著者の(2)に比べるとキリスト教の信仰者としての見方を明示しているのが特徴である（ただし、聖書などの知識がないとまったく理解できないわけではない）。

本書で著者は、著者がこれまでもよく用い、また 3.11 以後はブームになって日本中で氾濫<sup>はんらん</sup>した「絆」という言葉について、自身のホームレス支援及び被災地での支援活動の経験にふれながら、その意味を深く掘り下げている（したがって、本書のテーマは(2)の変奏曲ともいえよう）。

震災後、「震災婚」=いざという時のために必要な伴侶<sup>はんりよ</sup>を得るための結婚や“老後の「リスク・ヘッジ」（危機回避）としてのサークル活動”といった言葉が聞かれるようになった。そこには、他者を自己の手段とする発想がひそんでいる。そのように、今の「絆」に関する議論には、“本来の人間関係

=「絆」とは相互的で、責任とリスクを互いに負うものだ”ということが見落とされている、と著者は指摘する。

そのリスクとは、言いかえれば、「絆」において必然的に生じる、傷つくこと、である（支援活動の「出会い」の場でも、差し出した弁当などが拒まれたり、「俺たちを憐れんでるんだろう」と反発されたりする由である。おそらく介護などでも同様のことがあるだろう）。そして、その傷つくことを恐れ嫌って、避けるために人々が持ち出した理屈が「自己責任」論である。しかし、“「私事」に他人が係わり人を生かす仕組みである「社会」こそ、「人類の最大の英知」の産物であり、「自己責任」論はその「社会」を崩壊させるものだ”と著者は論じている。つまり「自己責任」論とは“困っている人の（身内以外の）周囲や社会、行政などがその人を助けることをしなくてよい”との宣言である。そして、「自己責任」社会は、実は自己責任をとるための環境（たとえば、就職の前提である住所や家、食べ物など）を提供しない無責任社会なのだ、という。

その「自己責任」社会は、人々から、したがって路上生活者からも、「助けて」と声をあげることを奪ってしまった。「助けて」と言える社会の創造を著者は追求している、とあってよいだろう。以上の考えは、いじめによる不登校となった息子さんのことで「助けて」と言えずに苦しんだ、著者自身の最近の経験とも重ねて、述べられている。

著者は“「助けて」と言うことはある意味で信仰告白に近い”として、「神の力は弱さの中に働く」との聖書の言葉を挙げている。また「絆」は傷を含むとの見方に関連して、“キリストの「十字架」は神が人間との絆を結ぶために傷を引き受け、それにより人間を救ったことを示す”としている。それは軽薄で身勝手な「絆」論や「自己責任」論の対極にある、というのである。

そして著者は、ボランティアないしホームレス支援を次のように位置づけている。ボランティアをしていると約束違反や裏切りを経験するが、ホームレス支援とは「赦しを必要とする罪人同士の支え合いに過ぎない」（それが「絆」の相互性でもある）との認識に立ってのみそれを続けていくことができる。さらに、「所詮、<sup>しよせん</sup> <sup>つみびと</sup> 罪人の運動です。できるはずは無いのです。できない人がやることに意味があるのです」とさへ述べている。また、支援者は、絶望に支配されたホームレスの人も変わるべきだ、とかその人を「変えて見せる」とかの「<sup>ゆが</sup> 歪んだ使命感」にとらわれてはならず、変わらなくても「生きているそのままでいいよ」と言い切れる必要がある。同時に、それは「そのままでもいい」としてその人の可能性を<sup>つま</sup> 摘み取ってしまう危険もあり、「その両方のせめぎあいを引き受ける」ことが大事だ、としている。

以上の紹介では伝えきれなかったかもしれないが、本書の中心的思想は、著者が信仰者として、聖書のメッセージに従い困窮者の「隣人」になろうとして自ら<sup>みずか</sup> 傷つき苦しみながら深めてきたものである。読者は、クリスチャンか否かにかかわらず、本書を通して、人が本当に生きる（生かされる）とは何か、という根源的な問いについての対話に導かれてゆくであろう。

念のために付け加えておくと、著者は深刻な内容を終始、重苦しく話すような人ではない。反対に、その実際の話しぶりは笑顔と解放的なユーモアに満ちている。おそらくそれは、<sup>しゅらば</sup> 修羅場をくぐりながら人を生かし、かつ生かされてきたことの<sup>しるし</sup> しるしである。

# 堤未果『(沈みゆく大国アメリカ) 逃げ切れ！日本の医療』 集英社(集英社新書)、2015年5月。

ISBN:9784087207859 本館 閲覧室1階 ベストセラーコーナー 学生用図書 364.4||T-1||2

分館 閲覧3階 自然科学

学生用図書 498.1||T-3||2

自身や家族が健康を害したり親が高齢で弱ってきたりすると、医療や介護が日々の痛切な問題になるものである。現代の日本では、その経験が全社会的に生じつつあるともいえよう。そして本書によれば、「世界最速で高齢化する日本は、投資家たちのドリームランド」だそうだ。「医療と介護は、需要が拡大しても価格が下がらない」からである。

その日本の医療と介護をいわば毒牙<sup>どくが</sup>にかけつつあるおぞましい存在について、またそれに対抗して人間らしい社会を築くための希望を与える事例についても、レポートしたのが本書である。近年活躍のめざましい著者の最新作で、精力的な取材に基づく印象的な事例と社会的(かつグローバル的)な背景の、簡にして要を得た分析——小状況と大状況の両方の把握——を組み合わせ<sup>たく</sup>た巧みな叙述で、読ませる。しかも著者の医療への関心は、「あとがき」が示す通り、病に倒れた晩年の父との関わりに発する、切実なものである。

本書の中心的なメッセージは、くり返し述べられているように、「無知は弱さになる」だろう。つまり、日本の国民皆保険<sup>かい</sup>制度は「いつでもどこでも平等に医療を受けられる」ことを実現したもので、「アメリカにはない憲法25条(=生存権)をベースにした、世界が嫉妬<sup>しつと</sup>する」すぐれた社会保障制度である。にもかかわらず、日本人の多くは国民皆保険や公的介護制度などについてよく知らない。素晴らしいものの価値に無知・無関心であれば、「簡

単にかすめとられてしまう」。それは医療と介護に関してアメリカと韓国で実際に起り、日本でも着々と進みつつあることだ、というのである。

その、いわば大がかりな詐取<sup>さしゅ</sup>を行なってきたのは、医療保険業界、製薬業界や医療・介護への投資で儲け<sup>もう</sup>ようとするウォール街などの組織や人々、そしてその代弁者たち（「規制緩和」などを唱<sup>とな</sup>える政治家、ロビイスト、官僚、学者、マスコミなど）である。

アメリカでは、医療と介護はすでに「コーポラティズム（業界と政治の癒着<sup>ゆちやく</sup>）」ないし「医産複合体」にほとんど乗っ取られた。公的な介護保険はなく、オバマ大統領による医療皆保険制度実現のためと称する「改革」＝「オバマケア」（＝民間医療保険への加入強制）も、――それで貧困層が救われたかのように報じられているが、――実は保険・製薬業界に牛耳<sup>ぎゅうじ</sup>られている。そのため、医療と介護は「贅沢品<sup>ぜいたく</sup>」で、金持ち以外は「天国に行く前に地獄を通過せねばならない」と言われるのが実情である。「地獄」とは、もちろん、まともな医療・介護を受けられずに苦しむ、悲惨な（老後の）境遇を指す。

とくに「投資家所有型の大型チェーン老人ホーム」では、ぎりぎり（以下）の数の介護スタッフが最低賃金以下で酷使されるため、事故が頻発<sup>ひんぱつ</sup>する。その一方で、株主たちは政府からのメディケイド（低所得者向け医療扶助）及びメディケア（高齢者医療保険）の交付金と利用者の利用料でボロ儲け<sup>もう</sup>している。

1961年に成立した日本の国民皆保険は、アメリカのような民間保険ではなく、国の責任で行なう「社会保障」である。しかし、1985年のプラザ合意による円高・ドル安の進行にともなって出現した「強欲資本主義<sup>ごうよく</sup>」は、金融部門が支配的な地位を占め、（製造業などが担<sup>にな</sup>う）实体经济<sup>こわ</sup>を壊していった。同じ頃、中曽根首相はレーガン米大統領と同じく「小さな政府」・「民営化」

路線を進めて社会保障への補助金を減らすとともに、日米間の「MOSS 協議（市場志向型分野別協議）」により、日本が（高度の医療技術をもつにもかかわらず）米国などの医薬品と医療機器を不当に高い値段で大量に輸入し続けるということが始まった。

また、1983 年に厚生省の局長が、過剰な医師数が医療費の高騰<sup>こうとう</sup>、そして日本の滅亡をもたらす、との「医療費亡国論」を表した。事実<sup>じじつ</sup>に反するにもかかわらず、その説はマスコミの便乗により通説化し、「日本の医療を〈経済〉に合わせるという、アメリカからの要求に利用されて」きた、と著者は指摘している。そして、今日まで行なわれてきた政策転換を通じて、国民皆保険にかんする国の責任はどんどん削<sup>けず</sup>られてきた、という。その政策転換とは、税制の「自己責任型」への切り換え（＝法人税減税とセットで、かつそれと同規模に近い累計額で、実施された消費税増税）、「地方分権」の名による、医療・福祉の責任の地方への転嫁<sup>てんか</sup>と、自治体の「半官半民の経営主体」への性格転換、月額保険料の引き上げ、診療報酬・介護報酬の引き下げ、年金積立金の株への投資、後期高齢者制度（＝国保・健保からの、高齢者・高齢障害者の排除）の実施などである（以上のアメリカと日本における社会的変化ないし変質は、先にその著書を紹介したドーア氏が指摘する、世界経済の「金融化」の結果と重なっている）。

日本政府が国民皆保険制度を骨抜きにする際に活用した反民主主義的な仕組みが、「経済財政諮問会議」（2001 年 1 月～）である（主に閣僚と財界人・経済学者などで構成される）。それは「総理自らが求める意見を、総理が議長をつとめる諮問会議で議論して、結論を出す。次に、これまた総理が議長をつとめる閣議に出すと自動的に決定、晴れて「政府の政策」となる」とのカラクリである。政府はその会議に野党・労組はもちろん、医療関係者も入れぬま

ま、アメリカの希望に沿った規制緩和（混合診療の解禁・拡大（患者の自己負担による「自由診療」枠の拡大）、保険会社参入、企業の病院経営参入など）を矢継ぎ早に行なってきた。「産業競争力会議」など、類似の組織がその後、続々と作られ、それらは現政権でも「事実上の政策決定機関」なのである。

そして、あまり知られていないことだが、2013年の法律で導入された「国家戦略特区」は、国内規制を外して（外資の歓迎する）「企業天国」を全国に広げるための突破口であり、韓国の実例が示すように、国民皆保険制度の形骸化を含む「国家解体」、「金融植民地化」のテコだ、という。

くわしい紹介は省く（本書など著者の作品を見られたい）が、著者は、アメリカでは大企業と金融業界によってマスコミ、政治家、ハーバードやMITなどの有名大学の教授たちが実質的に買収され、「あらゆるものを商品にする株式会社国家」が生じている、という。保険・製薬業界の利益を拡大するオバマケアが成立したのも、御用学者とマスコミなどの嘘の宣伝に国民がだまされたからだ、と。

同じ危険は、世界一、大手マスコミを信用する国民とも言われる日本で、すでに現実化している。それを示すのが、現政権の下で膨張した「政府広報予算」（始まってもない「社会保障と税の一体改革」の宣伝など）や、医師会を既得権にしがみついた人種という「悪役」イメージでとらえる報道である。だが米国の例が示す通り、医者がバッシングされ締めつけられれば、結局は患者の命と健康にしわ寄せが行くのだ、と指摘されている。

しかし、以上の、身の毛のよだつような現状ないし近未来のシナリオに対抗する動きも日米で生じている。すなわちアメリカでは、医師と患者の間に民間保険会社を介さない、「直接支払い診療」や、会員の寄付から成る基金

により医療費をまかなう、キリスト教会の共済（＝助け合い）組織、そして、保険会社・製薬会社の保険料・薬価を州が規制できる法律の制定を求める住民運動などである。日本では、医療技術の（権威化・商品化ならぬ）「協同化」＝協同組合の精神による運営で日本トップの長寿と医療費削減を実現した、長野県の<sup>さく</sup>佐久総合病院。また、子どもたちの食生活の改善による肥満減少（と将来の成人病の予防）を導いた東京都足立区の「給食革命」。そして、医師の苛酷な労働環境を知り、その負担軽減のために子供の病気とその対処法を学び「コンビニ受診」をやめた、兵庫県<sup>たんば</sup>（丹波市）の母親たちなど。

それらの例からは、ピンチをチャンスに変える可能性、すなわち、国が皆保険体制を維持する責任を地方自治体に押しつけたことを「<sup>さかて</sup>逆手にと」り、身近な自治体レベルで充実した医療を取りもどすとの希望が浮かび上がってくる。つまり、保険料の決め方などの細目が自治体まかせになったので、住民が自治体議員に働きかけ、良心的な地方公務員と協力もして、各地方レベルから皆保険空洞化の流れを押し戻し、それを中央政府にまで及ぼしていく、ということである。そのためには、もちろん、住民が医療と健康について自治体におまかせするではなく、当事者として学んで、自治体にたいする監視と働きかけを行なわなければならない。そのように、「自分たちの住む社会は自分たちで作る」こと＝民主主義を、その原点としての地方自治の場で実行することこそが、活路を開くというのである。

そして、地域医療及び「医療外交」でめざましい成果を上げ、医療を持続可能な「成長産業」にすることに成功したキューバや、自治体と<sup>れんけい</sup>連携して、地域の雇用や所得再分配＝困窮者支援に貢献している千葉県<sup>かもがわ</sup>鴨川市・<sup>たてやま</sup>館山市の亀田総合病院の例が示すように、医療は「地方創生の救世主」となりうる、

と主張されている。

本書の叙述の中で、日本人のDNAに協同・助け合いの精神が刻まれてきた、というのは疑問だし、（勤務医の苛酷な状況の指摘は重要だが、）従来の医師会や少なからぬ日本の医師に問題があったのも事実だろう（たとえば、自民党との癒着、患者の自己決定権を尊重しない権威主義的な姿勢など）。それら以外は、著者の分析や主張はおおむね妥当である。先の医師（会）の問題点も、住民による「自治」の進展の中で克服できるし、そうすべきであろう。

他にも、本書には、日本の医療や介護に関連して、今日「常識」化している——もっともらしく統計を引き合いに出した——見方（俗説）のウソないしスリカエを明らかにし、学ばされるところが多い。たとえば、「高齢化で医療費が高騰し、医療の破綻につながる」（実は、高齢化による医療費の増加は自然増の範囲内で、医療費を押し上げているのは医療技術の進歩と新薬。諸外国に比べれば日本の医療費は低く、患者の自己負担率は高い）。「薬の開発には膨大な費用がかかる（ので、高い薬価もしかたがない）」（大手製薬企業の場合、新薬の大半は既存薬の改良版で、新薬の研究開発費よりもはるかに多くの費用をマーケティングなどに投じている）。「財政赤字は1000兆円に達する」（諸外国の算出法と違って財務省は資産の部分を無視しており、それを計算に入れると借金は先の約四分の一の額となる）。

「日本の医師の数は十分だ」（欧米と異なり、現役以外の、超高齢や産休中の医師までカウントしており、それを除けば日本の人口当たりの医師数は先進国では低レベル）。

そして、毎日のように耳にする、“国民皆保険などの社会保障は世代間の助け合いの制度だ”との説も、（著者が指摘するように）憲法25条による、（国民に対して果たすべき、）国（=政府）の責任を曖昧にするということ、見落としてはならないだろう。

国民皆保険は、人権、民主主義や平和憲法とともに、戦後の日本がやっと手に入れた貴重な「宝物」である。それらを破壊しようと暗躍しつつある諸勢力の実像や手口を知り、その企<sup>たくら</sup>みを撃退<sup>げきたい</sup>する示唆<sup>しき</sup>を得るために、本書はマ<sup>マ</sup>ス<sup>スト</sup>トの必読書の一つとあってよい。

永井愛『歌わせたい男たち』 而立書房、2008年4月。

ISBN:9784880593470 本館 閲覧室2階 学生用図書 912.6||N-2

入学・卒業式などに関連して教員が処分されることが増えている。「君が代」演奏（や、日の丸掲揚）時の不起立や伴奏・斉唱拒否<sup>せいしやう</sup>がその理由である。本書はその問題をあつかった戯曲である。その特徴は、教員たち——校長と様々な立場の数人の——の会話が大半を占めていることである。それにより、読者に縁遠く<sup>えんどお</sup>、また違和感をもって受け取られがちな、その問題を、「現場」の事実として、つまり読者と同じ、等身大の生身<sup>なまみ</sup>の人間の——混乱や矛盾、猥雑<sup>わいざつ</sup>さ、などをともなう——経験として、わかりやすく伝えてくれる。

それが著者のねらいであり、かつ「取材の過程で得た実話」が多数、盛り込まれたことが特に効果をあげている。一、二の読みどころにふれると、ノンポリの新任音楽講師と——「ガチガチの左翼」とのレッテル貼<sup>は</sup>られているが、実は——繊細<sup>ヒューメイン</sup>で人間的な心情と節操ゆえに「不起立」を選んだ日本史教師の間の、しばしば名古屋弁を交えた、ユーモラスで軽妙な、だが勘所<sup>かんどころ</sup>ではシリアスでもある、やりとり。また、不起立などの「事件」回避<sup>しょうしんよくよく</sup>に小心翼翼々と苦悩・腐心し、無理な「君が代」解釈や珍妙な、「内心の自由」対「外心の自由」論などまでもちだして、懸命<sup>けんめい</sup>に（官僚的な）自己正当化を図る校長の、

哀れで愚かしい姿（その背景にある、「連帯責任」「管理責任」を名目として、広く校長や教員たちを教育委員会が処分・「指導」する仕組み）。

それらは、「国歌」（と「国旗」）の強制が、いかに理不尽で、かつ良心と人間性を<sup>おか</sup>侵し退廃させるものか、ということ、文学の力で説得的に示している（それらの強制には、「踏み絵」や戦前の思想転向制度に通ずる悪質さが認められる）。日本史教師ないし音楽講師が歌う3つのシャンソン（ダミアの「暗い日曜日」など）も、（「君が代」とは対照的に）そのメッセージが胸を打つ（ネットなどで実際の歌を聴いたり歌詞の翻訳を読んだりすると、興味が増すだろう）。

今日、「改革」を掲げつつ、実は大衆の非合理的な衝動を動員して公務員・教員・外国人・正社員などのバッシングで人気を<sup>はく</sup>博する政治スタイル（＝ポピュリズム）が——国の内外や、地方・「中央」を問わず、——台頭している。それと対決する上でも、本書は貴重な貢献である。

## 土井隆義『キャラ化する／される子どもたち

排除型社会における新たな人間像』岩波ブックレット、2009年6月。

ISBN: 9784000094597 本館 閲覧室1階 学科選定図書コーナー 学生用図書 367.6||D-3

日本のこどもたちの世界は、そして大人たちの世界も、異様に狭く閉鎖的で<sup>よど</sup>澱んだものになっている。貧困・格差・排外主義などとして現れる、社会的・政治的な「排除」（という大状況の問題）をふつうの個人の日常生活（＝小状況）において支えているのが、そうした「内閉的」な人間関係だ——本書を（ある大学院生にすすめられ）一読して、筆者はそのように感じた。

著者は、若者たちがよく使う「キャラ」という言葉を手がかりにその<sup>しんせい</sup>心性

を分析している。キャラは「キャラクター」の略語と同じではない。キャラには、「対人関係に応じて意図的に演じられる外キャラ」と「生まれ持った人格特性を示す内キャラ」がある（それぞれの役割は、「対他的な場面において自己の印象操作の<sup>ふか</sup>負荷を下げ、その<sup>じゆんかつざい</sup>潤滑剤」たること、「対自的な場面において自己の感情操作の負荷を下げ、その安定剤」たること、だという）。両者とも次の2点でアイデンティティーとは異なる。第一に、一貫したものでなく断片的な要素の集積であること。第二に、「社会生活の中で徐々に<sup>こうちく</sup>構築されていくもの」ではなく、（状況に応じて切り換えられることはあっても）「あらかじめ出来上がっている固定的なもの」であること。そして、子どもたちは同質的と感じられる者たちでグループをつくり、その内で自分に割り当てられた（単純な）キャラからはみ出すことや互いのキャラが<sup>にかよ</sup>似通ったものになる（＝「キャラがかぶる」）ことを、自分の<sup>いぼしょ</sup>居場所を危険にさらす行為として避ける。彼らの人間関係はグループ内だけで完結し、同じクラス内でも各グループ（の「カースト」＝上下の序列）が異なると互いの交流を避けようとする。

子どもたちはそうした狭い人間関係の中で、（――著者によれば、かつてのよ<sup>ふへんてき</sup>うな普遍的で画一的な<sup>かくいつてき</sup>規範<sup>きはん</sup>によって、ではなく）――個々の具体的な場面<sup>みぢか</sup>の、身近な「具体的な他者」からの評価・承認をもって、自己肯定感を得ようとしている、という。そこでは、「人間関係の拘束力」が強まらざるをえない。子どもたちがケータイの<sup>けんがい</sup>「圏外」表示、友だち関係から<sup>そがい</sup>疎外されることを恐れ、友だち関係において「対立の表面化の回避を最優先する」<sup>ゆえん</sup>所以である。

それに関連して著者は、秋葉原殺傷事件なども、孤立し疎外感<sup>つの</sup>を募らせた若者が、「人間関係の圏外へはみ出してしまった自分をふたたび圏内へ引きもどし、その存在を誇示するため」にひき起こしたのではないかとみている。

る（その解釈は先の奥田氏のそれと異なるが、事件には両方の側面があるのかもしれない）。

そして大人どうしの関係も子どもたちと「相似化」しつつある、とされる。それは、子どもと「友だち関係」に立とうとする親の増加にも現れている。また、「モンスター・ペアレント」という言葉の浸透の背景には、（——理不尽な要求を行なう親の増加だけではなく、——）教師も、生徒からの承認によって「自尊感情」を得ようとしてその反応に過敏となっているために、その感情の基盤を揺さぶるような親の言動に対しては、自己防衛のために攻撃的になっているとの事情がある、という。つまり、教師側の、「相手を、道理の通じない異物とみなして、安直に切って捨てようとする心性」が作用しており、親も教師も相手を異物とみなしている点では同類だ、というのである。

さらに「キャラ化」は、たとえば少年犯罪のとらえ方をも変化させた。以前は犯罪者が加害者であるとともに、悲惨・苛酷な家庭環境などの被害者でもあるとみなされていた。だが、「犯罪者の属性から社会的な要素を消し去り、純粹に個人的属性とみなしがちな昨今の風潮」からは、犯罪者を「個人的な所与の特質」の産物、「理解不能なモンスター」とみて、「異物として一方的に圏外化」し、厳罰化を要求する傾向が強まらざるをえない、と。

そこにも現れている、“生まれつきの素質で人生は決まる”という宿命主義的な見方に、若者たちは囚われている。彼らは「現在の自分の姿に、本質的なものを見たような気になってしま」い、学習や修練で自分を変えようと期待・努力することも乏しく、逆に多く（ある調査では過半数）の若者が「自分はダメな人間だ」などと思い込んでしまっている、と著者は指摘している（そんな思い込みは、「自分自身からの排除」の温床となるだろう）。

以上のように、若者（と大人）たちを蝕んでいる心性にたいして、著者は

最後に、”「不気味で異質なもの」「圏外」は誰の中にもある”と強調して、その事実を直視し、過剰な「関係依存」「人間関係への強迫観念」から解放されるべきだ、としている。すなわち、“「不気味な自分」を「圏外」に追いやったり、上辺を取り繕ったりするのではなく、それと向き合う力をつけること、また、「自分たちの生活圏を物理的・心理的なゲートで外部から閉ざすことではなく、むしろそのゲートを異質な世界へ向けて開放していくこと」、「多種多様な人達との世代を超えた出会いと共闘」が重要だ”と。

本書の叙述の中で、「価値観が多分化し、人びとの関心対象が千差万別になった」との現代日本社会観や、それとかつての「画一性」との対比などは、図式的にみえる。また、（因襲的「伝統」の押しつけではない、）内面的価値観に基づく、既成の人間関係からの独立という見地や、今日も続く、日本における“多数派・強者・「大勢」などへの同調の病”にたいする認識も、（視角がポスト・モダンの的に制約されているために？）不十分ではないか。つまり、社会や歴史についての著者の巨視的な見方には疑問なところがある（その点とおそらく関連して、現代日本社会の「心性」が細かく考察されている一方で、たとえば韓国・中国や欧米諸国など、他国との異同については言及されていない）。

だが、先に紹介したような現代の人間関係に関する（主に微視的な現象面の）著者の具体的な分析には当たっているところが多いだろう。じじつ、その分析を紹介すると共感する学生が多かったし、知的・道徳的な自立性が比較的強いようにみえる学生でも、「キャラが違う」と言われることや孤立することを恐がっていることがわかった。偶然的・閉塞的な友だち関係に行きづまって、“自分にはコミュニケーション能力が欠けている”などと悩んでいる青年は珍しくないだろう（“そんな心配は無用だ、現代日本の「つながり過剰症候群」

から自由になれ”と説いた著者のすばらしい一文は、彼らを救うだろうし、誰にも必読と  
いって良い：「友達づくり苦手でもいい」（『完全版 いじめられている君へ いじめてい  
る君へ いじめをみている君へ』朝日新聞社、2012年、所収。32-33頁））。

“内なる異質性と向き合うとともに多様で豊かな人びとと出会って（単純・  
固定的にとらえられた）自己（像）——を相対化しそれ——から解放されよ。そ  
して、「排除型社会の仕組みとそれを支える心性を克服」せよ”という著者  
の提言自体は、もちろん正当である（その内容は、「自分探し」にかんする熊沢氏  
の批評とも共通する）。ただし、その「出会い」としては、内面的な確信（良心）  
に基づいて、国家権力及び社会の多数派による迫害や抑圧（＝政治的専制と「社  
会的専制」）に抗して戦った先人たち（及び現代の人びと）との（読書などによる）  
「対話」を重視すべきだろう。彼ら、彼女らなくして、（「排除」の対極を成  
す）普遍的な人権・自由や寛容（そして、それらと結びついた意味での民主主義）  
が文明社会の常識として制度化されることはなかったのだから（関連して、昨  
年のブックリストで紹介した熊沢誠『私の労働研究』は、「いやな奴」・「『異端』の少  
数者」の人権に鈍感な日本の「世間知」を、（学校や職場のみならず労働組合などの内部  
にもみられる）パワハラやいじめなどの土壌として重視しており、正当である。同書  
pp.83,92,196 など）。